佐多稲子全集

第七巻／子供の眼

講談社

佐多稲子全集　第七巻

昭和五十三年六月二十日第一刷発行
昭和五十四年九月十四日第二刷発行

著者／佐多稲子
発行者／野間省一
発行所／株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所／豊国印刷株式会社
製本所／藤沢製本株式会社
定価／二八〇〇円

©佐多稲子　昭和五十三年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。　Printed in Japan

0393-152772-2253（0）　（文1）

目
次

子供の眼　7
いとしい恋人たち　64
*
移りかわり　264
海の中　287
胸に描く　298
仕事　312
道程　324

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伴侶 340
黄色い煙 351
靴と定期券 378
管野須賀子 391
あとがき・時と人と私のこと (7) 411
注解 418
初出誌紙・発表年月 424

佐多稲子全集　第七巻

子供の眼

一

修は絵本をひろげて、お膳の前に坐っていた。お膳の上には、もう夕ご飯の支度ができて、お茶碗も並べてあり、その上に白い布がかけてあった。その端っこに絵本をのせて修は読んでいた。かたわらで若い叔母の喜世子が夕刊をのぞいている。

修はくすんと、鼻をすすってページをくった。もう何度もくり返して読んだ漫画だから、お話のすじはよく知っている。修の顔がもうにやにやしてくる。そして、そのとおり、主人公がどぼんと川に落っこちたところで、修はひとりで、ははは、と小さく笑った。いつでも同じところで笑ってしまうのだ。

喜世子がからだを起して、

「なあに、なにがおかしいの」

と、彼女も笑った。

「うん」

と返事だけして、修はそのまま読みつづけてゆく。喜世子は本箱の上にのっている時計をのぞいて、

「おそいなア」

といった。

「兄さんたち、何してるんだろう。何でも冷めちゃうわ」

喜世子のその言葉の調子で修は頭を上げた。

「お父ちゃんのこと？」

「そうよ、お父ちゃんも、お母ちゃんもよ」

「もう帰って来るだろう」

小学校二年生の修は、幼なげに言ったが、その言葉づかいには喜世子の気持をとりなすようなところがある。けれども、喜世子はやっぱりいいつづけた。

「だってもう七時よ。修ちゃん、あんた、さきにご飯食べる？」

「うん、食べてもいいよ。お姉ちゃんもいっしょに食べようよ」

「いつだって、ご飯が二度になるんだから」

喜世子は吐き捨てるようにいって立ち上った。修は食卓の蔽いをとって、かきフライのお皿を眺め、膝をすすめながら、

「さ、食べましょう」

と、いそいそと言った。

喜世子はまた時計を見て、

「本当にいつでもおそいわね」

いいながら、修の茶碗にご飯をよそってやり、自分の分はそのままにしている。

「お姉ちゃん食べれば……」

「あんた、まあ、食べなさいよ」

「僕、かきフライ好きだ」

修はもう食事のほうに気をとられて、元気に食べはじめた。喜世子は瞼を重たくして、それを見ている。

「こぼさないでね」

喜世子にいわれて、修はあわててお膳の上にこぼれたご飯つぶを拾って口にいれた。

「僕、どうしてだか、はじめ、こぼしてしまうんだよ」

「あわてて食べるからよ」

「おいしいもんだから、何だかあわてちゃうんだね」

修のそんな可愛らしい言葉も、喜世子は感じないでいる。修は叔母の不きげんな表情に気がついているので、知らず知らず喜世子のごきげんを取るような言い方になっていた。

もう外はすっかり夜になって、縁側だけまだ雨戸が閉めてない。お隣りからラジオのニュースが流れていた。この辺りは都心を大分離れた場所で、都営住宅が建ち並んでいた。修の家もその一軒だ。喜世子と二人でご飯を食べるのは、もう慣れている。

父の俊二は今までもよく帰りがおそかった。が、二ヵ月前に新しい母がきてから、日曜日などは賑やかな食事をするようになっていたが、新しい母の幸子はやっぱりお勤めをしているので、叔母の喜世子と二人のときが相変らず多いのだ。喜世子は兄の再婚で、彼女の生活事情も変るかと期待していたのに、それがあまり変らない、というので不満だった。

「修ちゃん、あんた、お姉ちゃんがいなかったら、どうした?」

「うん」

ちらっと叔母の表情をみて、

「だって僕、ひとりでご飯のことできないもん」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「そうよ、お母ちゃんがいないからね、だけど今度は、お母ちゃんが来たんだから、ほんとうは、お母ちゃんがしてくれるのがほんとうよ。ね、だけど、あんたの新しいお母ちゃんはそれをしてくれないんだもの。何のことはないわ、お姉ちゃんは、あんたやあんたのお父ちゃんのために犠牲になってるみたいなもんよ」

修は黙っているしかない。折角、かきフライがおいしいのに、とおもうけれど、叔母の言うのも分る気がしていた。

「お父ちゃんももっとよく考えて結婚すればいいのにね。自分の好きだってことだけじゃ解決しないわよ。いろんな問題があるんだもの。みんな、私のこと犠牲にしているんだもの。お姉ちゃんだって、自分の生活のことがあるわよ。死んだお母ちゃんの病気のときから、ずっとなんだもの」

修は、もう死んだ母のことをいわれてもそれでどうこうということはない。母は病気で亡くなったのだ、という事実を承認しているだけだ。病院から母の遺骨がかえってきて、葬式をしたとき、修は、もう母には二度とあえないのだ、ということを自分で考えてみて、はじめて悲しかった。が、人の前で泣くのは恥かしかったので、裏の井戸端にしゃがんで、隠れるようにして、ひとりで泣いた。

そのとき、夕方の空が妙に黄色くて、それが修の気持にぴったりと焼きついた。二年も病院に入っていた母の死は、修の幼い気持にも、あきらめのようなものを植えつけている。

その後一年経って、新しい母がきたのである。修は、新しい母がきた、ということも、ただそういうものだ、というふうに、今度も事実を承認しただけだ。

喜世子が言うように、父は新しい母を好きで結婚した。結婚式のお茶の会のとき、修も父のそばに坐っていたが、そのとき何だか父も、新しい母もよその人のような気がした。

「ごちそうさま。僕、もうおなかいっぱいになっちゃった」

「おそいねえ、お姉ちゃんも食べちゃおか」

喜世子は、また時計を見ていう。修はまた漫画の本を取り上げて、如何にも満腹した、というように大人の仕草をまねて、うしろに片手をついた。

「お勉強しないの。いいの」

「もう、しちゃったもん」
「お姉ちゃん、いつまでもあんたのお勉強みて上げないわよ。自分でするのよ」
「するよ」
修は、喜世子が父や新しい母に対する不満で、自分に当っているのだ、ということが分っている。
「お姉ちゃんだって、お仕事があるんですからね」
「だから、するよ」
「あんただって、可哀そうよ。どこの親だって、子どもの勉強、みて上げるんだわよ。あんた、どうおもう。お母ちゃんのこと。やっぱりおうちにいて呉れたほうがいいでしょう」
「僕、お姉ちゃんがいればいいんだ」
「お姉ちゃんだって、いつまでもいっしょにいられないわよ」
「ふうん。そう」
「そうよ」
喜世子はお茶碗の音を立てて、自分も食事を始めながらいう。それは何だか修には、おどかすように聞えた。修は黙っていたが、そんなこと言わなくたっていいじゃないか、というような気がする。だって僕、子どもなんだもの。
そのとき、表に足音がして話し声も聞えた。父も母も一緒に帰って来たらしい。
「あ、父ちゃん、帰って来た」
修はやっぱり、父のことだけいって、喜世子の顔を見た。

二

修は父の俊二から渡されたおみやげが、その木箱の感じで苺だ、とすぐ分ると、
「わア、すごいなア、苺だよ、お姉ちゃん」
と喜世子に呼びかけた。喜世子はそれが聞えなかったかのように、修に答えないで台所へ立ってゆく。
修は弾んでぺたっと坐ると、背を丸めて包みの紐を解きはじめた。
「おそくなってごめんなさい、喜世子さん、私たち、食事は戸塚の家ですませてきたのよ」
修にとっての新しい母の幸子は、喜世子にそう言いながら俊二のあとについて入って来た。幸子は灰色のスウツのよく似合う、色の白い、ふっくらした顔をし

ていた。細い目がどこか甘ったれてみえた。俊二はその新しい妻と連れ立って満足しているように、気軽にハンチングを机の上にぽいと放って、
「修は、もうご飯食べたか」
「うん、でも、お姉ちゃんはまだだよ」
幸子は俊二の着かえを手伝いながら、
「あら、喜世子さん、まだ？　早く食べて頂戴」
喜世子は台所から出て来て、
「あら、なんだ。もうご飯、すんでらっしたの」
「そうなのよ、食べてゆけ、食べてゆけ、っていうもんだから、すませてきたの。待たせて悪かったわね」
喜世子は修のほどいている苺を見て、
「修ちゃん、ちょっと待ってらっしゃいよ。お姉ちゃん、今、して上げるからさ」
「うん、待ってるよ。ちょっと見るだけだよ」
包みをとくと、木箱の中に並んだ苺が、電灯の下できれいな色に光った。
「僕、苺、食べたいとおもっていたの」
言いながら修は父を見上げた。そういう修の、まつ毛にかげるような目のあたりが、俊二によく似ていた。俊二は着かえた丹前に帯をぐるぐる巻きながら火鉢のそばに坐って、
「修、勉強はすんだか」
「うん、もういいの」
幸子もスウツをカーデガンにかえて坐ると、苺のへたをとり始めた。
「お父さんたちね」
と、彼女は今までの話のつづきらしく、すぐ俊二に話しはじめる。幸子が、お父さんたち、というのは彼女自身の親のことだった。
「その話、あとでしようよ」
と俊二は言って、留守中の部屋を見まわし、
「何も変ったことなかったね」
ひとりで食事をはじめた喜世子は、
「ええ、別に」
と、顔を上げずに答える。
「明日から、俺は出張なんだ」
「一週間ばかり九州へ行って来るからね」
「あら、そう」
喜世子が言うと、修も父を見上げて、
「お父さん、出張？」
「そうだよ、修は、お母さんとお姉ちゃんと三人でお

留守番するんだ」
「うん、いいよ」
修は、幸子の苺のへたをとっている手元を見ながら、急いだようにして答える。
喜世子は黙ってご飯を食べながら心の中で、兄の留守の間、幸子がほんとうにこの家に毎日帰って来るのかしら、と、皮肉な考えになっている。
今日も俊二と幸子が食事をすませて来た戸塚の家というのは幸子の実家で、その実家がまた幸子の仕事場でもあったのだ。
幸子の父の元井安之助は、高田馬場の近くで小さな歯科医を開業していた。幸子自身も歯科医専を出て、父の家で手伝っている。安之助は終戦後に朝鮮から引揚げて来ての、なじみの薄い土地での開業であったが、それだけに娘の幸子を頼りにもしていた。それに幸子はひとり娘だったのである。以前ならば跡とり娘というわけで、家業も継がせ、外へ出してやる娘ではなかったが、幸子の三十を過ぎた婚期のこともあり、俊二との今度の縁談に幸子自身のすすんでいたのが、親たちのあきらめともなって一応、幸子は俊二のもとへ嫁いだ形だった。が、安之助夫妻にとっては、幸子の嫁いだあとのこの二ヵ月の間にも、まだあきらめきれぬ感情のしこりが何かのときに出て、幸子自身、しばしばその間に立ってわり切れぬおもいをしていた。
「何か、ガラスのうつわか何かある？　喜世子さん」
「ガラス鉢、ってないんだけど」
「いいわ、いいわ、何でも」
「君、立っていって見て来たらいいじゃないか」
俊二は喜世子が立ちかけると、そばから口を添えた。
「そうね、いいわ、喜世子さん、私、見て来るわ」
新しい妻は、毎日外へ出ているので、嫁いで来た家で、まだどこかよその人のようなのだ。修は、ちらと喜世子の顔を見る。喜世子が苺のおみやげに、もっと嬉しそうな顔をすればいいのに、と、彼はおもうのだ。喜世子はまだ一度も、苺のことを言わない。
幸子は台所の戸棚から果物皿を出して来て、苺をそれに取り分けながら、
「あなた、ミルクをあけて下さいよ」
「よしきた」
と、俊二は、小さなミルク罐に穴をあけた。苺は等分に分けられてゆく。修はじいっとそれを見ている。

「はい、修ちゃん」
と、幸子は、さっぱりしている。修は苺の皿を片手で押えてたのしげに、苺を匙でつぶした。喜世子は自分の食事のあと片づけに立って、台所から戻って来ない。
「お姉ちゃんも、早く、来れば」
と修は喜世子を呼んだ。幸子は修の喜世子を呼ぶ気持を知らない。
「戸塚のお父さんねえ」
と、喜世子の戻って来ないうちに、もう苺を食べはじめながら、また実家の話を切り出した。
「私たちを、戸塚のうちに一緒に住まわせたい気持なのよ」
「あの家、狭くて入る部屋なんかないじゃないか」
「そうよ。だけどねえ、やっぱり淋しいらしいのね」
「そんなこと言ったって、しょうがないじゃないか。俺は、厭だよ」
「私だって、そりゃ厭よ。だって私、自分のうちでよさそうにおもわれるかもしれないけど、そりゃ、やっぱり今となれば、私だって気兼をしなければならないもの」
「だからさ、放っときゃいいよ。年寄りは、なんだかんだと、愚痴っぽいさ」
「お母さんがねえ、お父さんの機嫌をとるのに苦労してるんですって。やっぱり自分の家の跡を継ぐものがいなくなった、と言っちゃ、憤るらしいのよ」
「ま、そんな気持も分るけどさ。跡継ぎなんて今はもうないんだよ」
「それは分っているのよ。でも、人間の感情って、なかなか割り切れないのよ」
「それで君まで引きずられてるのかね」
「そうじゃないけど」
「そんなら、いいじゃないか」
「うん、ま、そうね」
幸子は、皮肉な微笑を浮べて苺をすくい上げて口へ持ってゆきながら、何か考えるような視線になっている。喜世子はそのころ部屋へ入って来て、兄たちの話は聞いていなかったように苺の皿を手に取った。修がそばで言う。
「お姉ちゃん、苺、おいしいよ」
修のそういうのは、喜世子の機嫌をとるつもりでもあり、父と新しい母の今の問答を、他へ展開させたい

からでもあった。が、喜世子は修のそんな心づかいを無視するように、

「修ちゃんに半分上げるわ」

と、言って、自分の皿の苺を修の皿に移した。

「僕、いいんだよ」

と、修は言い、父と母の顔を見た。

三

その週の日曜日は、いいお天気だった。郊外でまだ近くに梢の高い森もあるこの辺りでは空が澄んで、ぶるんぶるんと飛行機の通る爆音がゆっくり聞えた。セーターに手を通しながら修が縁にそって見上げるとB29の翼が銀色に光ってみえた。

台所では幸子が朝の支度をしていた。喜世子は縁先きのささやかな庭で花壇にしゃがんで何かしていた。喜世子はこんな花つくりなどが好きだ。桜草や三色すみれが崩れたように咲いているそばにあやめが紫、黄色、白、とりまぜて、すいすいとした葉の間に美しく花を咲かせていた。二軒ずつ長屋になっている都営住宅の、隣りで赤ン坊の泣くのが聞えた。

あ、今日はお母さんと戸塚の家へ行くんだったけ、と修はおもい出した。いつもなら幸子は日曜は休むのだが、急ぐ仕事があるのだ、と言って、丁度俊二が出張中だから、修を連れて出掛けて来るというのだった。

「修ちゃん、顔洗ってらっしゃい。ご飯よ」

と幸子が呼んだ。

「はあい」

膝までの短ズボンの脚で、わざと小きざみに縁を叩いて歩いて台所へ行った。

「今日は戸塚のお家へ行くのね」

「そうよ。きれいに歯を磨くのよ」

幸子は茶の間にお膳を出しながら、うしろ向きのまま言う。修は裏に出て井戸端でポンプの水を汲んだ。

三人で食事がすむと、喜世子は修の着てゆく外出着のセーターや靴下を出してやり、

「お行儀悪くしちゃア厭よ」

と言った。

修は、喜世子が今日の日曜日に映画を見にゆきたいと言っていたのを知っていたから、自分だけ幸子と連れ立ってゆくのを少し気の毒におもっていたけれど、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com